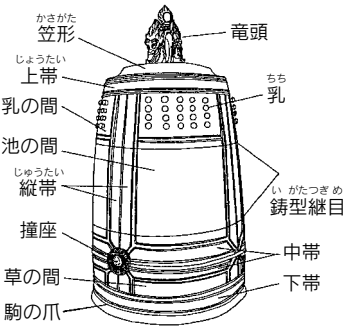
香取遺産

Vol.70

「浄土寺の梵鐘」

運ばれた梵鐘

▲浄土寺の梵鐘



梵鐘各部の名称

大戸川の浄土寺は、阿弥陀三尊を本尊とする浄土宗の寺院です。創建年代は、境内の板碑などから鎌倉中期には成立していたと考えられています。

山門をくぐると正面に鐘楼があり、そこに南北朝時代に鋳造された梵鐘が懸垂されています。

梵鐘はそもそも仏教教団生活の規制のための用具でしたが、後には時を知らせる合図や寺の儀式の合図に打ち鳴らすための梵音具となりました。

梵鐘は、下方に丸く口の開く「鐘身」と、これを懸垂するために付けられる「龍頭」からなっています。

鐘身は紐と呼ばれる隆起線で縦横に区画されています。上部に突起物を配する「乳の間」、その下に銘文を記す「池の間」、中帯と下帯の間を「草の間」と呼んでいます。そして縦帯と中帯の交差する前後2カ所に「撞座」が設けられています。

浄土寺の梵鐘は、口径58cm、全長98cmとやや小ぶりで「撞座」は八葉単弁の蓮華文を表しています。そして「池の間」には端正な文字で3種類の銘文が陰刻されています。

ひとつは、現存の浄土寺梵鐘が鋳造される以前の旧鐘に記されていた銘文を写したものです。それによれば、建長6年（1254）に磯上眞長が鋳造し、宝福寺（所在地については不明）という寺院に納めたということです。

2つ目は、宝福寺において現存の梵鐘を鋳造した時の銘文で鋳物師の藤原末政が貞和5年（1349）に鋳造したことが刻まれています。

3つ目は空白だった「池の間」に新たに追記したものです。銘文によれば、慶長7年（1602）6月、木之内神五が旦那となり、浄土宗開祖・法然上人の流れをくむ奥州岩城（現在の福島県）の南蓮社人譽上人が願主となって、宝福寺に懸垂されていた梵鐘を「下総香取之郡大戸河浄土寺」に移した経緯などが記されています。

所在地が判明していない宝福寺という寺院から慶長7年に浄土寺にもたらされた梵鐘は、400年余にわたってこの地で大切に保管されてきました。

そして、昭和50年3月千葉県の有形文化財に指定されました。

問い合わせ
生涯学習課　☎(50)1224